平成十二年五月発行　四四〇号　発行／黒埼町役場　〒九五〇－二一九六　新潟県西蒲原郡黒埼町大野二八四三－一　電話／〇二五－三七七－三一〇一　編集／総務課（担当・総務係）

# 黒埼町の今昔

第217回　執筆　宮田栄門

## 黒埼のスポーツ（十一）

太洋クラブの名は、当時有名だった函館のオーシャンクラブをヒントにつけられた。

（先月号からの続き）

昭和天皇の即位を記念して新町の土手の土で埋立てられて昭和五年か六年に完成したものであるが、スタンドもあり当時としては近郷に比べるものもないくらい立派なもので、陸上に野球に当時としては名選手が輩出した。

当時の野球は学生と都市対抗であった。函館のオーシャンクラブが有名で、そこをヒントにして太洋クラブと言ったようである。

私の在籍中に、長谷川慶作が新潟県庁のピッチャー。箱田健吉が新潟商業の名ピッチャーであった。太洋クラブの七十年史というので、何か資料がないかと調べていたら、一枚の写真が見つかった。この写真から思いおこすことがある。この写真は、私が復員して青年団に加入していたころ（昭和二十三年）のものである。

戦後の民生化の時代で、貧しい時代ではあったが、心豊かな時代であった。相撲だとか、演劇などが盛んであった。それでは俺たちは野球をやろうということではじまった。当時、野球の心得があったり、道具があるというのは戦前に経験のある者であって、自然太洋クラブのメンバーと当時新潟大学、中学、商業、工業の学生で始めることになった。

写真で見ると、当時の近郷野球で優勝したときのものである。私が監督をしていたようである。鈴木医師（当時学生）は名キャッチャーであったし、宗村氏は兄弟で活躍し、いまは亡き大坂久六は名ファストであった。鈴木、宗村などは新潟工業の選手であったから実力は相当に高かった。弥彦の郡大会だとか、近郷では屈指のチームであった。

青年団の野球と太洋クラブは同一のものであった。戦後の町民運動会に対比するように町内野球大会も盛んになり、「六三制野球ばかりがうまくなり」と言われるように、戦後の野球は盛んになった。このころは非行など思いもよらぬことで、子供たちも野球に親しんでいた。そんなことが、いま黒埼町野球発展の土台になっているのではないだろうか。

平成三年、記

浅妻康二先生は、平成十年九月二十二日に亡くなられた。心より先生の御冥福をお祈りします。

太洋クラブのルーツの発掘に取組もうとする浅妻康二さんの意欲あふれる手記である。「今は知る人も少くなったが、昭和三年に先輩高橋正平さんたち当時の中等学校生によってつくられた太洋クラブこそが、黒埼町野球の始まりである。」と記されている。

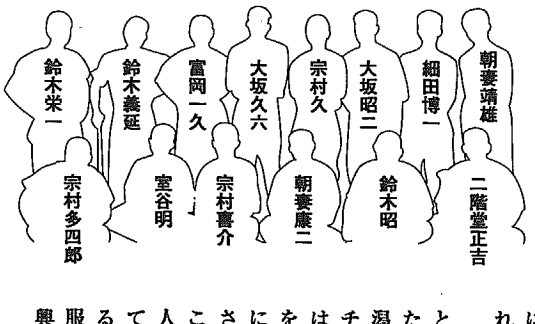
太洋クラブの名は、函館のオーシャンクラブ（今の久慈堂というのはその名キャッチャー久慈の名前をとったものである。）が有名で、そこをヒントにして太洋クラブと、つけられたということである。

浅妻さんの新中在学中に太洋クラブがよそと試合をするとき、当時新潟県庁のピッチャー大野七区の月の湯（家号甚左エ門）の長谷川慶作さんや、同じく七区にあった旅館箱田屋の、箱田健吉さんが新潟商業のピッチャーだったので、休日などによく太洋クラブの遠征試合に出場して活躍したという。

上記の写真は昭和二十三年浅妻康二監督を真ん中に大野小学校のグランドで撮った記念写真である。

「この写真は昭和二十三年、私が戦後復員して青年団に加入していたころのもので、戦後の民主化の時代で貧しい時代ではあったが心豊かな時代であった。」と記されている。そして「相撲だとか演劇が盛んとなったので俺たちは野球をやろうということで始まった。」とも書かれている。

昭和23年ころ、当時の太洋クラブ浅妻康二監督を真ん中に




今思いば、筆者の小学生時代の土曜の午後や日曜日に大野小学校のグランドへ行くと、太洋クラブの人たちが元気な声をかけ合い、一生懸命に練習の汗を流していた。特に印象に残っているのは、写真前列にハツラツとして写っている筆者の同級生鈴木昭医師の名キャッチャーぶりだった。大声をあげてチームをはげましていた、若くて元気なあの鈴木少年の姿を今の鈴木先生からは想像できない。

今は亡き、大坂久六さんを名ファストだったと浅妻康二さんはいっておられたが、あの大きくがっしりした体の大坂さんがファストを守っていると安心感があった。大坂さんは二ノ丁大駒洋品店の大坂康信さんの父であるが、後に大野町総代などの公職を努められ、昭和六十二年に亡くなられた。

また「宗村氏は兄弟で活躍し」とあるが、二人は二ノ丁に昔あった鶴ノ湯の人で、兄弟揃って新潟中学を卒業。兄喜介さんはピッチャーとして活躍し、弟久さんは肩が強いということでレフトを守った。他に筆者の二歳程下に新町の鈴木てんや商店に栄一さん（新商）という人が居て、この人もほんとに野球大好きな人だったが、残念ながら若くして他界された。同じく写真にある筆者の同級生で新町の大駒呉服店出身の大坂昭二さん（現在興野）はキャチャーだった。

（続く）

「広報くろさき」は資源保護のため再生紙を使用しています。